

# 中国ワークキャンプ報告 in2008

Friends International Work Camp (FIWC)九州



2008年 秋 発行：FIWC九州

はじめに

たくさんの、村人をみました。

そして、

人のためにほんとうに一生懸命になっている人をみました。

人の幸せをほんとうに願っている人をみました。

誰も見ていないところで頑張りつづける人をみました。

毎日をすごく楽しんでいる人をみました。

すごく悩んでいる人をみました。

人のために、自分のために、みんなのために、ほんとうに戦っている人をみました。

人の優しさをみました。

人の笑顔をみました。

人の泣いている姿をみました。

それらは僕にとって、とても衝撃的で、強く心動かされるものでした。

そして、日本に帰ってきました。

日常が始まりました。

何事もなかったかのように、始まります。

そんな中、ふと中国でみたものを思い出すときがあります。

そしてこう感じます。

中国でもらったものはとてつもなく大きく、ずっと心の中にあり続ける。

そして、すべての人に感謝・感謝・感謝・・・

感謝です！

塩川壮拳

## 目次

1、はじめに	P.1
2、FIWC、JIA、ハンセン病について	P.3～4
3、キャンプの目的と意義	P.5
4、準備～キャンプまでのスケジュール	P.5
5、シャンロン村ワークキャンプ報告	P.6～20
①村について	P.6
②キャンパー日の流れ	P.6
③ワーク内容	P.7～9
④各リーダーの反省	P.10～12
⑤キャンパー紹介	P.13～15
⑥キャンプの感想	P.16～20
6、会計報告	P.21
6、JIAネットワーク会議	P.22
7、リンハウ村訪問	P.23
8、全体反省	P.24
9、中国・湖南省地図	P.25



## FIWC、JIA、ハンセン病について

### FIWC (Friends International Work Camps) について

FIWC(フレンズ国際ワークキャンプ)の起源は、1919年、第1次世界大戦直後のオランダにさかのぼる。この年、オランダでは国際友和会の会議が開かれ、「以前の敵との和解は、いかなる物質的利益をも考慮に入れない、奉仕の精神に基づく、一般的な仕事(ワーク)によって促進される」という決議がなされた。この会議に参加していた、スイス人のクエーカー教徒ピエール・セルゾールは、これを具体化するものとして国際ワークキャンプを提案したのだった。そして翌1920年、第1次世界大戦でフランスとドイツの激戦地となったウェルドンという村に出かけていって、戦争で破壊された村の復興を呼びかけた。その結果、かつて敵同士であったフランス、ドイツ、スイス、イギリス、ポーランド、オランダ、ハンガリーなどから若者たちが参加して、10数人でキャンプが行われるようになった。これをきっかけにしてピエール・セルゾールは、世界で破壊された場所に行けばはキャンプを呼びかけ、その運動の輪は次第に広がっていった。これが世界最初のワークキャンプだったのである。日本にこのワークキャンプの運動が伝わったのは、第2次世界大戦後の1945年に、アメリカ・フレンズ奉仕団(AFSC)が「広島の家」建設キャンプを行ったときである。AFSCは、戦後、国外からの帰国者の住宅設備など、戦後復興のための様々な活動を行った。そして、日本キリスト協会協議会青年部会によってワークキャンプの活動が採用され、その下で学生を中心とした日本ワークキャンプ委員会が組織され、運動が全国的に波及していったのである。

現在のFIWCは、この運動を引き継ぐもので、1950年代より日本国内外で様々な活動を展開している。現在では、関東、関西、広島、九州に各委員会(=支部)があり、それぞれ情報交換をしつつ、自律的な活動を行っている。

FIWC九州は、2004年4月に、それまで関東、関西、広島の各委員会で活動していたメンバーが九州に集まったことによって立ち上がった新しい団体で、2005年春、FIWC九州初のキャンプがフィリピンレイテ島において行われた。現在では、フィリピンはもちろんのこと、中国、国内での活動を展開している。フィリピンでは主にwater systemの整備、中国においてはハンセン病をテーマにワークキャンプを実施。また、フリーマーケット開催による資金集め・大分県耶馬溪農業キャンプ・他団体との交流・ニュースレター発行など、国内活動にも力を入れている。

### JIAについて

私達がワークキャンプを開催するにあたって、必要不可欠なのがJIA。JIAワークキャンプコーディネーションセンターは2004年8月に、ある日本人の若者により中国広州に設立されたNGOである。中国各地にワークキャンプを根付かせること、そしてそれらと世界を繋ぐワークキャンプのグローバルネットワークを築くことを目的に活動を展開してきた。

これらの目的を達成するため、JIAは3つの機能を果たしている。一つ目が、中国におけるワークキャンプの情報収集と共有、次に、キャンパーへのトレーニング・ワークショップの開催、そして最後に、一つ一つのワークキャンプと世界各地の団体や人々との接続の3つである。

上記のように、情報センター、トレーニングセンター、ネットワークセンターとして活動してきたJIA。その拡大には目を見張るものがある。たったひとりの若者が立ち上げたNGOは、中国各地でワークキャンプを広め、キャンパーのトレーニングを行ってきた。その結果、現在は数え切れないほどの熱意あふれるキャンパーが、ワークキャンプを、そしてこのJIAを支えている。また、2007年夏からはこれまでの韓国、日本からの参加に加え、ドイツからの学生もワークキャンプに参加しており、そのグローバルネットワークも着実に広がってきていると言える。

JIAのワークキャンプは現在、おもに中国のハンセン病快復村にて実施されている。キャンパーは村の生活環境を改善すべく、キャンプ中はワークに精を出す。そして忘れてはならないのが、未だにハンセン病という病に取り付いた差別・偏見が色濃く残る中国ハンセン病快復村とそれを取り巻く地域社会。キャンパーはワークキャンプという手段を通して、こういった社会問題にも積極的に取り組んでいる。ところで、JIAとはどういう意味なのか。JIAとは中国語の「家」をアルファベット表記したものである。また、同時に、「Joy In Action」、言葉より行動を、の頭文字としての意味も持っている。「World as One Family by Work Camp」をモットーに、ワークキャンプを通じた村人との家族のようなツナガリを生み出している。

広東省広州から始まったJIAの活動は、広西省、雲南省、湖南省へと広がりがつつある。世界中のキャンパーを巻き込んだワークキャンプが、中国全土、625のハンセン病快復村に届けられる日もそう遠くはないはずだ。

## ハンセン病、中国におけるワークキャンプについて

ハンセン病は細菌(らい菌)によって引き起こされる感染症の1つである。「らい菌」は、人間の体内に入ると主として皮膚および末梢神経に増殖性炎症を引き起こす。それにより、知覚麻痺、運動神経障害や、顔面、四肢等の変形、眼等様々な組織の障害などの症状が現れる。こういった症状により、ハンセン病は差別の対象になってきた。しかし、らい菌は感染力が弱いため、らい菌に感染しても通常は発病しない。すなわち、栄養失調、極度の疲労やストレス、乳幼児期の感染や、非衛生的な生活など、つまり環境・衛生・経済などにおける様々な負の因子が重なった場合にまれに発病するが、状況が改善されれば自然治癒することもある。1980年以降、世界保健機構(WHO)は、ハンセン病蔓延国に向けたグローバルな対策として、多剤併用療法(MDT)を推奨している。MDTにより「らい菌」は数日で死滅し、早期に治療すれば後遺症を残さずに完治する。

### 日本のハンセン病

日本では1930年ごろから警察力まで動員し、ハンセン病患者たちを強制的に隔離していった。人々の社会的偏見をあおりながら、隔離を正当化する政策がとられたのである。その根拠となったのは「らい予防法」であり、この法律は医学的根拠を失った後も1996年まで存続した。らい予防法が廃止された後、国が予防法によって行った強制収容、終身隔離、患者作業、断種など様々な人権侵害に対して 反省と謝罪を求める気運が高まり、「らい予防法」違憲国家賠償請求訴訟が起こされ、原告である元患者側勝訴の判決がなされた。しかし、予防法が廃止され、国の責任が裁判で明らかになった今も、隔離前に暮らしていた故郷に帰って生活している人はほんの微々たる数。平均年齢が約80歳となり、全国の療養所で暮らす入所者は2800人を下回っている。最近では将来構想に基づく療養所の社会化が課題となっており、解決に向けて話し合いが進められている。決して、過去に起きた出来事ではなく現在も続く問題である。

### 中国のハンセン病

中国には625にも及ぶ大小さまざまなハンセン病快復村がある。中国では日本の「らい予防法」に該当するような法律があったわけではなかったが、社会におけるハンセン病の理解も乏しく、また中国において有用な治療法がまだ普及していなかった時代、つまり1980年頃までは、中国のハンセン病政策としては隔離政策がとらる唯一の政策だった。中国のハンセン病快復村は、南部に集中しており、その中でも広東省が最も多く省内には67箇所のハンセン病快復村がある。広東省以外では、江蘇省、山東省、雲南省、四川省に多くの快復村がある。2002年の時点で、中国で治療中のハンセン病患者は6325人で、人口1万人あたりの罹患率は1人以下となり、WHOが定めた公衆衛生問題としてのハンセン病は制圧された。しかし、日本同様、中国でもハンセン病に対する差別、偏見は根強く残り、ハンセン病が治癒した現在も社会復帰ができず、快復村内で暮らすことを余儀なくされている人の数は、中国全土で4万人にもぼるといわれている。彼らの生活は地方政府から支給される生活給付金に依存しているが、その額は地方により異なる。地方政府によってはその財政上の問題から、非常に小額の給付金しか支給できないところもある。今現在も1950年代から60年代に建設された倒壊寸前の家屋で、清潔な水を供給する設備やトイレ、電気すらない環境での生活を余儀なくされ、後遺症に苦しみ、孤独に生活している高齢の村人が大勢いる。

FIWCではこういった中国のハンセン病快復村でワークキャンプを行っている。1~3週間村に住み込み、水道の整備、トイレや家屋などの建設プロジェクトを主に行う。FIWC九州発の中国キャンプは2005年夏、広西省にあるピンシヤン村から始まった。そして今回2008年夏は湖南省のシャンロン村でのキャンプを行った。

私たちは「JIA「家」」のコーディネイトのもと中国の大学生が組織するワークキャンプ団体とともに村に赴く。キャンプ中の緊密な協力関係、共同生活により、キャンパーと村人、キャンパー同士の間には継続的な信頼関係が生まれる。ワークキャンプがもたらすこの人と人とのツナガリが、ハンセン病快復村への偏見・差別の解消につながることを私たちは願っている。



さがしゅつくでのミーティング



直前合宿@びおとーぶ

## 中国ハンセン病快復村に行く目的とワークキャンプの意義

私たちが中国のハンセン病快復村でキャンプをするのは、「ハンセン病」によってもたらされた問題がより多く存在するからです。

閉ざされた村の状況、過去に隔離されたという事実、それによって生まれる村の雰囲気と村人の精神的状況、わずかに政府からの援助金があるにしても、貧しく、働くにしても、後遺症、高齢によって体が不自由なことや、土地がない、そして周りの偏見によって外へ働きに出ることもできない。水道や電気が整備されていなかったり、建物が老朽化しても、なにか生活するに不便なことがあっても、お金がない。生きるのに精一杯でその解決に費やす時間がない。労働力もない。政府が動いてくれなければ解決できない。

すべての村がすべて上記した状況にあるわけではありませんが、このような問題を解決するために私たちは隣の中国という国のハンセン病快復村でキャンプをします。しかし、私たちがこれら全部を解決することはできません。私たちができることといえば、水道の整備、道の舗装、トイレ建設などのインフラ整備をその村のニーズにあわせて行うこと、村人の身の周りの手伝い。また、周囲の人たちがその村に抱いていた認識を変えることもできます。それにより村への人の流れも生むことができます。そしてなにより村人との交流。村人と楽しく日々を過ごすこと。

つまり中国のハンセン病快復村に行く目的を大きくまとめると、「差別、貧困の解消、楽しい空間をつくること」と言うことができます。そしてその手段がワークキャンプなのです。

ワークキャンプの最大の意義は、キャンプ中に築かれる、村人とキャンパーのつながり、キャンパー同士のつながりにあります。1、2週間程度のキャンプ期間ですが、ともに汗を流し、ご飯を食べ、お酒を飲み、語り合い、笑い合う、想い合う。その中で徐々に関係が築かれていきます。だんだん思い出が共有されていきます。

しかしなにも私たちが村人に一方的にいろいろと与えているというわけでは決してありません。まずは村人によって村での生活を体験させてもらっています。村人によって生きる姿勢を考えさせられたり、村人の優しさから感動をもらったりと、むしろ私たちがもらうもののほうが大きいかもしれません。

ワークキャンプは、人の中にある優しさ、奉仕する心、思いやる心を引き出す活動だと思います。そして、そういう気持ちで動きに動きて、村人もだんだん心を開き、そのような中で私たちと村人の間にできるつながりが、キャンプの魅力であり意義と言えます。

## 下見からキャンプまでの流れ、中国での日程

3月-キャンプ地決定	7/12,13 第5回MTG(佐賀)
4月-他団体とともに新歓ガイダンス(4/16,23)	勉強会・FIWCとは
5月-中国キャンパーが再度下見(5/1~4)	・家の発展と現状、役割
隆回キャンプのためのmixi開設	・ワークキャンプとは
6月-FIWC新歓ガイダンス(6/4,6)	8月-8/2 第6回MTG
メンバー確定	8/6,7 直前合宿@びおとーぶ
6/9 第1回MTG	8/7 中国出発
6/24 第2回MTG	8/10 キャンプ開始
6/28, 29 第3回MTG(恵楓園)	8/20 キャンプアウト
勉強会・ハンセン病の歴史と現状	8/21~23 ネットワーク会議
7月-7/8 第4回MTG	8/24 帰国第一陣(6人)
	8/24~27 リンハウ村滞在
	8/28 帰国第二陣(5人)

# 响龙村(シャンロン)ワークキャンプ

## ①村について

村名(創立)	中国湖南省隆回県小沙江鎮响龙ハンセン病回復村(1958年)
村人	12人(平均年齢は70歳。3組の夫婦がおり、一組の兄弟がいる。)
生活状況	政府からもらう生活資金(毎月150元)、※金銀花(スイカズラ)・じゃがいも・とうもろこし・インゲンマメ栽培、農地の貸与代(出来高の30%をもらう)によって生活している。電気、水道、トイレがあり、建物も丈夫である。比較的よい生活環境であり、村人の精神状態もよい人が多い。人通りも多い。 ※薬草 利尿・健胃・解熱薬になる。
交通アクセス	隆回県から150キロ以上はなれた場所にある。隆回県から車で3時間強で小沙江鎮到着。その後三輪車やバイクに乗り30分ほどで村の入り口に着く。5分ほど歩き、村到着。
村の抱える問題点(それに対する今回の取り組み)	<ul style="list-style-type: none"> <li>●村には大小あわせて10本の橋がある。村の入り口から村に行くまでは4本の橋を通るのだが、その中の3つはただ大きな丸太を用いて作られた簡単なものであり、かつ腐りかけている(1つは石で作られた橋)。住居に最も近い橋が一番多く使われているが、その橋が1番崩壊度の危険が高い。(→その1番危険度が高い橋を今回修復。)</li> <li>●村にはトイレが4つあるが、1つは壁が今にも壊れそうなほどに傾いていた。また1つのトイレは屋根の作りが粗末で、雨漏りもしていた。(→前述のトイレは全壊し、新たにトイレを建設。後述のトイレは屋根の修復を行った。)</li> <li>●道路から村までは起伏のある道を通っていく。途中田んぼのあぜ道のように細い道もあるが、一部道がくずれ隣を流れている小川に足を滑らしそうな箇所がある。</li> <li>●何世帯か雨漏りしている。</li> <li>●キャンプ中雨が激しく降った時、村に2カ所ある水道のうち1つの水道から水が出なくなった。半日ほど出なくなったが、その原因が不明である。</li> <li>●村人が住んでいる建物は2つあるが、その1つに2人の村人がそれぞれの部屋に住む。その2人の仲がよくないらしい。</li> </ul>
今後の取り組み	上記の問題点を解決していく。また今回ハウスワークで行った薪切りや草刈りなども引き続きキャンプ時に行っていく。そして湖南省でキャンプの宣伝をし、湖南省の大学生がキャンプへ参加するよう取り組みが必要である(今回の中国人キャンパーのほとんどは広西省の学生)。湖南省でもキャンプの輪を広げていきたい。

## ②キャンプ一日の流れ

6:30 全員起床	*エクササイズは日本のラジオ体操と、中国人キャンパーが教えてくれた体操！意外と難しくてハードだった・・・
7:00～ エクササイズタイム	
7:30～ 朝食	*食事は、食事係りが1時間半前から作る(朝は1時間前から)！ *食事の前にはキャンプソングを歌う！ *食事やワーク、ミーティングの時間はずれることもしばしば・・・でも、基本は左記の流れ
8:00～ 午前のワーク ワーク、ケア、ハウスなどに分かれて活動	
11:30 午前のワーク終了	
12:00～ 昼食	
12:30～ 自由時間 お昼寝したり、洗濯したり、キャンパー&村人と遊んだりする時間	
15:00～ 午後のワーク開始 午前のように分かれて活動	
17:00 午後のワーク終了	
18:30～ 夕食	
20:00～ ミーティング 各リーダーから今日の活動状況、明日の活動内容を報告 食事作りや、各ワークの担当者決めも	
21:00 ミーティング終了 日本人キャンパーは、終了後”日本人ミーティング”	
23:00 就寝	

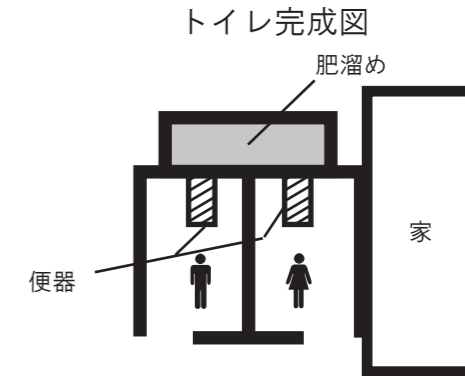


キャンプソングをみんなで

## ③ワーク内容

### ●ワーク1 《ファーストトイレ》

このトイレは、壁が斜めになっており、少しの衝撃で壊れそうな状態であったため、今回ワークとして建設を行うこととなった。



①既存のトイレを壊す。  
②肥溜めと便器になる部分に穴を掘る。



③壁となる部分に溝を掘り、そこに石とセメントを入れ、壁の土台を作る。



④肥溜めの床にビニールを引き、レンガとセメントで肥溜めの壁を作る。



⑥ブロックとセメントで壁を作る。



⑤レンガとセメントで便器を作る。



⑦木で屋根の基礎を作り、そこに瓦を並べる。



⑧床をセメントで固める。



⑨電気を設置して完成！

## ●ワーク2 《ファーストブリッジ》

この橋は、農地と住宅地をつなぐ不可欠な橋で、非常に頻繁に使われている。しかしこの橋は並べた丸太の間に砂を詰めて作られているが、その木と木の間は、砂を詰められている部分と詰められていない部分がある。また、非常に古く、木が腐りかけているため、渡る時にみしみしと音を立て、危険な状態であったため、今回新しく橋を建設することとなった。



①既存の丸太を並べた橋を壊し、隣に臨時の丸太で作った橋を並べる。



②橋の土台を作るための穴を掘り、その穴に石とセメントを入れ、積み上げて橋の土台を作る。



④木の板で作った枠にセメントを流し込み完成！



③木の板で橋の枠を、木の板と丸太で支えを作る。

## ●ワーク3 《セカンドブリッジ》

セカンドブリッジは、当初ファーストブリッジに使用する予定であったコンクリートの板が運搬作業中に折れてしまったために、急遽折れたコンクリートの板の一部と丸太を使建設することになった。

- ①既存の橋をずらす。
- ②石とセメントで橋の土台を作る。
- ③購入したコンクリートボードをかけ完成！



## ●ワーク4 《セカンドトイレ》

屋根に使われていたビニールシートなどが古かったため、張り替えることになった。

(方法)

- ①建物の骨組みはそのまま、それ以外を取り除く。
- ②屋根となる部分にビニールシートを被せ、その上に板をのせ固定し、木の皮で覆い完成！



## ●ケア

今回わたしたちからケアを提供することはしなかった。その理由としては、村人の足の傷を実際に見ることができなかったためだ。村人のほとんどが自身の傷をみせることに抵抗があった。わたしが実際に傷を見たのは一人だけである。その村人の傷や皮膚の状態は比較的良好で潰瘍もなかった。後遺症の状態としては、膝以下の麻痺、両足もしくは片足を切断、ほとんどの村人に手足の変形がみられた。3人の村人の足底に潰瘍があったが、彼らは毎日足を洗い消毒をするセルフケアができていた。そのほかの村人もみなセルフケア(手足を洗うこと)ができていたため、わたしたちがケアを提供する必要はないと判断した。したがってケアとしては、毎日の村人の体調把握を中心に行い、必要時ケア用品(消毒液、綿棒等)の提供、ワーク等でできた傷の手当を行った。今回ケアとして行えることは非常に少なく、ハウスワークと協力することが多かった。また、その分村人と話す機会を多く持ち、村人の内心に触れることが多くあった。彼らはこれまで隔離、差別や偏見などさまざまな体験をしてきており、その心の傷は根強く残されている。彼らのつらい気持ちを癒すこと、つまり身体的なケアだけでなく、精神的なケアへの配慮も必要だと考える。



## ●ハウス

シャンロンでは当初3つのワーク(村人のお家を訪ねてニーズを聞くこと・たきぎ切り・金銀花という葉草干し)を展開し、他のワークについてはキャンピングしてから、リーダー間で話し合いながら適宜、対応することになった。日にちが経ち、村人との仲が深まると、村全体の生活が見えてくるようになり、草刈り(道の舗装、畑までの道のり)・髪切り・髪洗い・布団洗い・ベッドの蚊帳の洗濯・服の裁縫もワークの中に加わった。これらのワークがきっかけとなって、村人とキャンパーの距離が近くなり、村人が笑顔になることも増えた。ワークを通じてキャンパー、村人が笑顔になるときはハウスリーダーとしても喜びを感じる瞬間であった。

問題点として、1つめはキャンピングしてからハウスリーダー間でのコミュニケーションを上手く取れなかったことだ。2日、3日目以降になるとコミュニケーションが徐々に取れるようになり、最終的に意思疎通の問題はなくなった。

2つめに村人に不平等を招く事態を起こしてしまった。これが一番大きな問題となった。最終日のパーティー後にミーティングで初めて知ったが、自分の中では終わったワークと思っていた「ポンおじいちゃんの家たきぎ切り」が実は中途半端なところで終わっており、結果、村人すべての家庭に平等にたきぎが行き届かない状態となった。

その出来事は、中国人ハウスリーダー側も知らなかったようで、情報の共有以前に、各ハウスワーク担当者からの情報収集を怠った結果だと思う。

2つの問題点から、次のキャンプで改善できることは「情報の共有(ワークの進行具合を示した簡単なグラフ作成など)、各ハウスワーク担当者がワーク後にハウスリーダーに報告する」である。村人の生活そのものが見えないと分らないことも多く、ケアとの情報交換も必要であると感じた。この改善策と共に次のキャンプにこのワークを活かしてほしい。



## ④各リーダーの仕事内容と反省

### ● General leader (谷之木勤任)

#### 【仕事内容】

すべての責任がある。その気持ちを持って、周りに気を配りつつ行動しなければならない。キャンプに関しては、まず、キャンプに対する姿勢を言動で示す。みんなを動かすことが大事になってくる。また、日本人キャンパー、中国人キャンパーをつないでいくことも必要。みんな同じキャンパーである。みんなを大事に。全体の雰囲気注意到意し、妥協せず、キャンプをよりよくしていこうとする姿勢を持つ。毎日のミーティングを行う。

#### 【反省】

僕が一番の反省は、日本人キャンパーと中国人キャンパーとの間のコーディネートをうまくできなかったことだ。具体的にあげれば、日本人キャンパーと中国人キャンパーみんなで、キャンプに対する思いだとか、このキャンプについてどう思うか等の思いを共有できなかった。そのような場を設けなかった。人数が多いということもあり、妥協した。それができていればもっとみんなのキャンプに対する姿勢というのも変わってきたと思うし、キャンパーに一体感も出て来たはずである。

また中国側のGLともしっかり話しておけばよかったと反省している。けっして話していなかったわけではないが、キャンプの運営だけの話だけではなく、キャンプどうあるべきか、どうするべきか等の話をもっとできていれば、それに対する取り組みもできて、またキャンプが違ったのかなと思う。

### ● Work leader (瀬上愛・塩川壮拳)

#### 【仕事内容】

ワークリーダーの仕事内容は、中国人ワークリーダーと事前連絡をとり、今回のワーク内容の把握することとワークで中心となって働くこと。そしてミーティング中にその日のワーク内容と次の日のワーク内容をキャンパーに伝えること、次の日のワークの人員を確保することの4つである。

#### 【反省】

ワークリーダーとして、ワーク内容の把握のための事前連絡が足りなかったこと、作業中、分からないことが多々あったので、中国人キャンパーにもっと尋ねるべきであったし、中国人キャンパーに任せっきりになってしまう場面も多かったのもっと積極的に「やりたい!!」という意思表示をすれば良かったと思う。また、ワーク中、村人から道具を借りていたのだが、その管理がおろそかになってしまっていたので、リーダーとして責任もって管理しなければならなかったことも一つの反省点である。

ワークを進めていく中で、中国人はワークを完遂することが第一の目的で、それに比べ日本人はワークは村人やキャンパーとの触れ合いの手段として考えていた。だから私たちは、中国人は日本人と共に作り上げていくという意識が薄いと感じるが多かったのも、ワークを行う上での目的意識について中国人キャンパーと本気で熱く語るべきだったと思う。

### ● Recorder (井上祐介)

#### 【仕事内容】

レコーダーの主な仕事は以下に挙げる4つである。

1つ目は、写真を撮ること。これはレコーダーにとって一番重要な仕事である。何のために写真を撮るのかというと、報告書等に使うなど広報に使用するためで、そのため、ワーク内容の写真を詳細に撮る必要がある。

2つ目は、キャンパーの中でミーティングの中で伝えきれなかった思いを持つものがあれば、それを聞き取り記録し、壁に掲示しておくことである。

3つ目は、全員の感想のとりまとめをし、中国側に送ることである。

4つ目は、キャンパー同士に互いにメッセージを書きあう、メッセージノートを作ることだ。

#### 【反省】

良かった点は、写真を詳細に記録することができたことだ。特にワークに関しては、詳細な手順まで記録することができた。

反省点、文章的な記録についてはあまりまとめることはしなかったことである。一応GLは把握していただろうが、比較的工作が少ないレコーダーが今後は責任を持って記録したほうが良いと思う。

また、メッセージノートはキャンプ中に作ることに決めたため、単に紙を切って貼ったものになってしまった。今後はもう少しきちんとしたものを日本から持って行ってもいいかもしれない。

### ● Care leader (宮原久実)

#### 【仕事内容】

私が実際に行ったことは、村人の情報収集、ケア用品の提供(消毒などが必要な村人に対して消毒液や綿棒を提供)である。また、特に疾患や後遺症にこだわらず、毎日の体調はどうか、変化がないかを尋ねて回り、風邪気味のおばあちゃんには生姜湯を提供したり、上着を着るよう促すなど、村人の体調変化に応じてできることを行った。

#### 【反省点】

反省点は、まず一つ目に毎日村人全員の家を回ることができていなかったことだ。キャンプ4日目まで1日に2~3人しか回れていない状態だった(5日目から全員の家をまわるようにした)。もっと早くから全員の家を回るようにすべきだったと思う。二つ目は、話すことができない村人とのコミュニケーションが難しくしっかりと情報収集できなかったことだ。言葉がはなせないからこそ、表情やしぐさを観察していたが、まだまだ不十分だったと思う。三つ目にケア用品を提供したが、それが不平等だったのではないかと。私たちが提供した人は潰瘍のある3人だけ。それはその3人にケア用品が必要だと判断したためだ。しかし、その時その他の村人のことを考えていなかった。何かを与えるときは他の村人がどのように思うか、もっとその配慮をするべきだったと思う。

### ● House leader (井芹和幸)

#### 【仕事内容】

ハウスワークは当初、村人の家を訪ねる、たきぎ切り・金銀花(薬草)干しを予定し、他のワークについてはキャンプインしてから臨機応変に対応することにしてた。村人のニーズに合わせて、草刈り(道の舗装、畑までの道のり)・髪切り・髪洗い・布団洗い・ベットの蚊帳の洗濯・服の裁縫がワークとして加わった。

村人の収入に直結する金銀花干しは、村の天候が変わりやすいため、雲の具合に気をつけながら、村人と協力して作業を行った。天候の変化はハウスワーク全体にも影響を及ぼし、草刈り・たきぎ切りはキャンプ後半に急ピッチで行われた。ハウスワーク担当以外のキャンパーも時間を見つけては、村人の話し相手をしたり、生活の介助を行っていた。ワーク内容はケアと重なる部分があり、ハウス・ケア間での情報共有も大切であると感じた。

#### 【反省】

今キャンプのハウスの大きな問題としては2つ挙げられる。1つめはキャンプインしてからハウスリーダー間でのコミュニケーションを上手く取れなかったことだ。2日、3日目以降になるとコミュニケーションが徐々に取れるようになり、最終的に意思疎通の問題はなくなった。2つめに村人に不平等を招く事態を起してしまったこと。これが一番大きな問題となった。最終日のパーティー後にミーティングで初めて知ったが、自分の中では終わったワークと思っていた“ポンおじいちゃんの家のだきぎ切り”が実は中途半端なところで終わっており、結果村人すべての家庭に平等にたきぎが行き届かない状態となった。

その出来事は、中国人ハウスリーダー側も知らなかったようで、情報の共有以前に、各ハウスワーク担当者からの情報収集を怠った結果だと思う。

2つの問題点から、次のキャンプで改善できることは「情報の共有(ワークの進行具合を示した簡単なグラフ作成など)、各ハウスワーク担当者がワーク後にハウスリーダーに報告する」である。村人の生活そのものが見えないと分らないことも多く、ケアとの除法交換も必要であると感じた。最後にポンおじいちゃん、村人、キャンパーのみんなに迷惑をかけて申し訳ないと思う。ごめんなさい。そして、この改善策と共に次のキャンプにこのワークを活かしてほしい。

### ● KP(Kitchen Police) (岩野晃子)

#### 【仕事内容】

KPは主に食事に関する仕事です。次の日の朝食、昼食、夕食の当番を前日のミーティングで決定して、朝当番の人を起こす仕事もしていました。また、台所の片付け、食べ物の管理など食事に関する雑用などもKPの仕事です。

#### 【反省点】

中国人側のKPと事前にあまり連絡を取れておらず、事前の準備が不十分だったために日本食を食べることを楽しみにしてくれている中国人キャンパーもいたにもかかわらず、日本食をあまり作れなかったことがKPとして一番の反省点です。また、あまり主張しにくいかもしれないけれど、主張すべきところはきちんと主張して、食事においてもっと日本人カラーを出してもよかったかなと反省しています。また、キャンプが行われるのが中国ということや中国人キャンパーが日本人キャンパーの二倍の人数がいたこともあって、中国人側のKPの子に負担をかけすぎてしまったことはとても反省しています。

## ● Account leader (古川優太郎)

### 【仕事】

今回私がした仕事は、村に着くまでと、村を出てからのお金の管理すなわち日本人だけで行動した時のお金の管理です。食費、交通費、ホテル代などみんなで使ったお金の管理をしました。

特筆すべきことはこれといってありません。

### 【反省点】

キャンプにおいての会計を中国側に任せっきりだったので、内容は教えてもらうことはできたのだがすべて事後報告で、お金の使い道について口を出せなかった。積極的なコミュニケーションとめげない気持ちが必要だった。

立て替えは後で合わなくなる元となるので極力さけたほうが良い。みんなにも立て替えはさせないという意識を持たしておく必要がある。

## ● Life leader (藤吉絵里佳)

### 【仕事内容】

ライフリーダーの仕事としては、電気・水道など生活にかかわる事柄についてキャンパーに注意をすること、寝るところや洗濯物を干す場所の確認、寝袋干しなどがあげられる。これらは中国側のリーダーと協力して行った。また、お茶沸かし、部屋の掃除なども行った。今回は、ライフの係りをキャンパーから毎日3名ずつ選んでいため、ミーティングでその係りのメンバー確認をすることもライフリーダーの仕事となった。ライフの係りの仕事としては、寝袋の方付け、ごみの処理などがあつた。

### 【反省】

ライフリーダーとしての反省点はたくさんある。まずは上に書いた仕事を十分にこなせなかったことだ。リーダー同士で仕事の内容を事前に確認することが難しく、またキャンプ開始後のコミュニケーション不足により、リーダーとして仕事を理解するのに時間がかかった。そのため、キャンパーの生活に十分に気を配ることができなかった。また、キャンパーに対しても、ライフの係りの仕事を上手く説明できず戸惑わせてしまった。キャンパーの生活を、物質的な面でも精神的な面でも整えることができなかったことが最も大きな反省点である。

今後、事前の連絡などを十分にしてからキャンプに望むべきだと感じた。また、ライフリーダーとして、キャンパーの体調管理も重要になってくる。日ごろからの予防も大切であるが、万が一地元の病院を利用するようなことになった場合の対処法も考えるべきであると思った。

## ● Entertainment leader (徳田潤平)

### 【仕事内容】

今回、担当した仕事は、(1)キャンプソング、(2)パーティの準備、司会、(3)ムード作りであった。

キャンプソングについては村に入ってから、中国人側が日本語詞と中国語詞が両方あるものをいくつかピックアップし、それをリーダー同士で相談して決定した。パーティについては、キャンプ最終日の夜に村人全員を招いて、日本人側からソーラン節と楽器(ギター、ハーモニカ)演奏、中国人側からは手話ダンス、歌、楽器(リコーダー)演奏など、そしてゲームが行われた。ムード作りでは、ワーク中や休憩中、特にみんなが疲れているときなどに歌を歌ったり、ダンスをしたりととにかく場を盛り上げることが大事であった。

### 【反省】

(1)キャンプソングは、昨年キャンプ前にすでに中国人側が決定していたために最初に意見を求められたときに若干戸惑ったので、事前のキャンプ前のメールのやり取りにおいて相談しておくべきであった。キャンプソングは日本の有名な歌で中国語詞があるものがいくつかあるので(たとえば「それが大事」、「乾杯」など)今後日本側から提案することも可能である。

(2)パーティについては、やはり事前の準備不足と進行の遅さ、そして村人をあまり巻き込めていなかったことが反省される。中国人側のプログラムがあまり練習されていなかったことと村人全員がパーティの前にご飯を食べてくると聞いていたにもかかわらず数名はご飯を食べていなくて、結局一緒に食べることになったことについて中国人側との連携があまり取れていなかったという点が準備不足としてあげられる。また、料理の完成に時間がかかり、パーティの開始が遅れて村人を長時間待たせてしまったことも問題とされる。その結果、夜遅くまで村人を拘束してしまった。最大の問題はパーティで村人を十分に巻き込めていなかったことである。ゲームはキャンパー主体のもので村人はただ見ているだけだったし、他のプログラムも村人は見るだけ、聞いているだけのものだった。パーティの目的はこれまでお世話になった村人を楽しませるものなので、どうしたら村人がもっと喜んでくれるかを考え、話し合う必要があつた。

(3)ムード作りに関しては、日本人側が主体となって歌をうたったり、バカ騒ぎをしたりしてキャンプの雰囲気を盛り上げることはできた。ただし、もっと中国人キャンパーそして村人も巻き込めるようなゲームやダンス、歌などをして一緒に盛り上がるのができたと思う。

村人のためにできることの一つとして考えると、パーティはワークと同じくらい重要だ。そのため、よく練られたパーティをする必要があると考える。またエンターテインメント性は中国人より明らかに日本人のほうが高い。よって、パーティはもっと日本人がリードして進めていくべきであった。来年以降、パーティの重要性はもっと増してくると思われる。そのため、出発前からパーティについては日本人同士でも、中国人との間でもよく話しあう必要があると考える。

## ⑤ キャンパー紹介



珠珠(ジュジュ)

昨年よりも一層たくましく格好良くなった彼…今年もGLとしてみんなをしっかり支えてくれた。別れ際でみせた涙に私も思わずもらい泣き…優しい私のお兄ちゃん、大好きだよ(ハート)(byくみ)



小崖(シャオヤー)

真面目そうな第一印象を覆し、よくふざけ面白いシャオヤ！特にゲームの時の彼は見物です。お互い苦手な英語とジェスチャーを酷使してワークリーダーと一緒に頑張りました！(byあい)



蜂子(リン)

料理上手で優しくかつよく英語もうまい…パーフェクトなリン！学校でもモテモテでプレイボーイなリンは私に会う度に「愛してる」！私はそんなリンにときめく毎日でした！(byあい)



楊甫(ドギー)

賢くて、金持ちで、まじめなのに、じゃっかんオタク。とはいえ、彼のような男が中国社会を引っ張っていくんだろうなと、そんな気がしました。(byじゅんぺい)



邱邱(ヤンヤン)

キュートな笑顔をもつ癒し系の彼女は、とても働き者でいつも笛を吹いてご飯、ワークの時間を教えてくれていました。そしてパラパラを上手に踊る。でも恥ずかしいのか顔は無表情でした笑(byゆきと)



檸檬(レモン)

めっちゃ力持ち！ばりばり力仕事を男に混じってしました笑。しかし内面は優しくおしとやかです。“レモン”なのに彼女の中身はあまいっす。そして口数は少ないけどかなりあついのを持っています！(byゆきと)



李麗(リリー)

「ハ～イ！」という挨拶とともに発せられる、リリーススマイル！これには、老若男女、やられてしまいました。めっちゃくちゃやさしい女の子。正直、もう惚れるしかない！！(byいの)



小唐菜(シャオツアイ)

彼女の名はシャオツアイ。彼女はクール&ビューティーだ。彼女は怒らせると少し怖い。しかし彼女はいつも食事や食器洗いを人知れず手伝っている。その優しさに心打たれたboyは少ないだろう。(byソルティアー)



継 迭(ジーシュエン)

ワークも料理もできるたくましい彼。しっかり者で頼れる存在でした。キャンプの途中からかわいい彼女がやってきました。彼女によると、結構シャイボーイらしいです。(byえりか)



超超(チャオチャオ)

チャオチャオは優しい女の子です。そんな優しい彼女はどうかやキャンプで彼氏ができたようです。でも彼女の作ったおかゆの味を知ってるのは私だけです！(byあきこ)



阿豪(アーハオ)

中国キャンパー1のオモロ〜！ボーイ、アーハオ。見た目は日曜大工のお父さん、中身はお茶目な少年。そんなギャップがたまらない。彼のおっちょこちょいぶり、必見です！(byいの)



莫莫(モモ)

同じハウスリーダーとして一緒に頑張った彼女。いろいろ苦労したけどハウスと一緒に出来て良かったと思う。日本語めっちゃ上手かったよ！ホントありがとう。(byかず)



娜娜(ナナ)

彼女は本気で男にどつきますが、日本人には日本語でやさしくしてくれます。かわいっていと照れます。僕からのキスも受け取ってくれます。そう、彼女こそ真のツンデレです。(byじゅんぺい)



图图(トウトウ)

時々、すごくセクシーな衣装や大胆な行動で周囲をびっくりさせたけど、みんなのことを一番に考える優しい女の子です。新婚旅行はぜひ沖縄に〜♪(byあきこ)



阿桶(アートン)

うざかった。しかし優しくかった。誰とでも話し、みんなと打ち解けることができていた。英語が堪能で、彼女に通訳をお願いすることも多々で、彼女のおかげで分かり合えた。(byゆうたろう)



庄志海(庄さん)

通訳としてサポートしてくれて本当にお世話になりました。実は下ネタも達者で必殺技の「それ、何ですか？」と辞書を駆使し、「変態老師」としても活躍。ハッハッハ(笑)(byかず)



大莫(ダーモウ)

「いえー」が口癖のダーモ。キャンプの最後のほうはみんなだまねしていた。ワーク現場には常に彼の姿があり、力が強く、とて頼れる存在だった。そして変態だった。(byゆうたろう)



小新(シャオシン)

高校生の彼はなんと17歳！ゲームではあどけなさが残るも、ワークは大学生並みに力を発揮！けどやっぱりピュアです。若いっていいなあ！(byくみ)



孙怡(サニー)

いつもにこにこしていて、笑顔がとってもかわいい女の子。英語ペラペラ。実は食いしん坊という一面も。村人ともキャンパーとも、楽しそうに過ごす彼女に癒されました♪(byえりか)



曾儘(ジョンウェイ)

彼の名はジョンウェイ。彼はとにかく働く。どんなに辛くても決してくじけないsoulを彼は持っている。そして実は少しおちゃめだ。彼は静かなる闘志はみんなの心を暖かく包んでいたに違いない。(byソルティ)



兰婷(ランティン)

ジーシェンの彼女。途中からの参加だったけど、働き者で、すぐみんなと仲良くなっていました。常にのろけ、ジーシェンを愛してやまないかわいい女の子です。(byえりか)



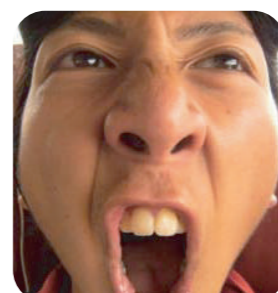
郑学(ジュンシュエ)

途中から参加したへく村キャンパー。翌日から第一線でワークをこなす格好良く立派なワーカー！初め寡黙と思いきや、人見知りなだけの気さくでユニークな男の子でした！(byあい)



谷之木勤任(Tony)

みんなの信頼感と存在感は圧倒的。ハートが熱く、優しく、時には寒く(下ネタ)皆をリードした。ユキトがいなければ成り立たなかったキャンプ。最高の思い出をありがとう！(byかず)



徳田潤平(Jun)

頼れる副キャプテン。センスのあるギャグを連発し、彼の周りには笑いが絶えなかった。彼なくしてこんなに笑ったキャンプは作れなかつただろう。(byゆうたろう)



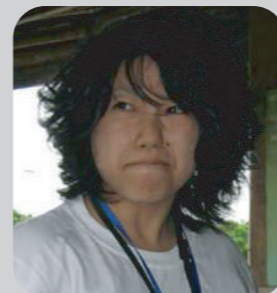
古川優太郎(Yutaro)

その顔で何人もの中国人のハートを射止めたイケ面帝王。実際はただの変態陸軍将校なのに、時々みせる優しさにさらに女の子は虜に。寝る子は育つという言葉を実証した男。(byじゅんぺい)



井上祐介(Ino)

病院仲間です(笑)虫刺されに苦しんでいたけど、弱音一つはかかずキャンプを盛り上げてくれた頼もしい先輩です。個人的にはいのさんのショウさんのモノマネ大好きです(笑)(byあきこ)



湊上愛(Ai)

女の子ながら、ワークリーダーをしっかりと務めた愛。かつこよかったです。いつも笑顔で優しく、その姿に何度も助けられました。二人で語ったあの日を忘れません！大好き！(byえりか)



岩野晃子(Akiko)

彼女の名はあきこ。またの名を太陽の下に生まれた元気っこ。太陽のように明るく毎日笑いながら、また学生でありながら、母のような包容力でみんなを優しく見守っていたに違いない。(byソルティ)



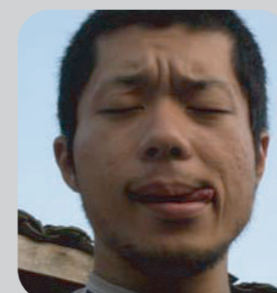
塩川壮拳(Solty)

日本が誇るギャグバズーカ、ソルティ。そのイケメンぶりに油断していると、彼の放つ親父ギャグで、いつの間にか氷河期にタ〜イムスリップ！まあ、ギターもワークも何でもこなす、ナイスガイですけれどね。(byいの)



宮原久実(Kumi)

久実の屈託の無い笑顔大好きでした！村人・キャンパー皆から愛されてたのは、誰とでも最高の笑顔で楽しく優しく接するからでしょう！沢山の笑顔を作ってくれてありがとう！(byあい)



井芹和幸(Kazu)

熊本に住む堅実で実直で責任感あふれるイケ男。キャンプ前なぜかポーズしてきた笑。向上心も半端ない。彼女に対する思いも半端ない。彼の今後の活躍に乞うご期待！(byゆきと)



藤吉絵里佳(Erika)

あふれんばかりの気品と優しさを併せもち、絶えないあなたの笑顔には、村人、キャンパー、みんながいつも癒される。そんな藤吉だが、意外にブラックな一面も！！(byくみ)



渡辺文(わたん)

突如、キャンプ地に現れた11人目の日本人。カメラと帽子と酒が似合う謎の女神。その実態は、自由人わたん。最後にへんは確実にいじりの対象になってました。(byじゅんぺい)



## ⑥キャンプの感想

### ●谷之木 勤任

人は、誰しも存在理由を求めている。どうしてここにいるのか、なんのためにここに生きているのか。ハンセン病を患った人は、過去に蔑ろにされた経験がある人が多い。どうして生きているのだろう、と置いておきた日々もあったら。今も続く辛いこともあるのかもしれない。今振り返ると、僕は村人の存在理由に少しでもいいからなりたかったのだろうと思う。キャンプ中、村人を笑顔にしたい、うれしそう表情を見たいがために動いた。

キャンプ中、おばあちゃんが突然口に出した。「来てくれてうれしい。」すごくうれしかった。中国のハンセン病快復村には様々な問題がある。しかし、1番村人が今の僕らに求めていることは、僕らが村に行き、村人と楽しく過ごすことなんだと思った。そして今の僕らにできる最大のこともそういうことなんだと思う。

今回、近くの村人が僕たちのワークを手伝ってくれたり、帰省中の大学生が訪れたり、キャンプ中たくさんの訪問者があった。病院に付き添いで行くことがあったが、病院にいる人も僕らのことを知っていた。うわさが広がっているということを知った。やっぱり僕らの活動がハンセン病の差別の解消につながっているのだと思った。

村人と別れるとき、これえきれず涙があふれた。10日間というほんとは短い間であったが、僕は本当に村人を好きになっていた。ワークキャンプの魅力は、人のなかにある、優しさや、奉仕する心、人を思いやる気持ちを引き出す点にあると思う。そして、その心で動きに動いて、だんだんと村人との距離も近づいて、最終的にお互いがお互いを求めるようになることだと思ふ。そうやってできる僕らと村人との間のつながりだと思ふ。

別れのときの、村長の奥さんが「再見！再見！」と悲しそうに叫んでいたのが忘れられない。

お互いをお互いを想う気持ちと共有しているキャンプの思い出が、これからも僕らをつなげ続ける。

今回のキャンプ、家族の理解がなかったら行くことができなかった。僕を支えてくれた仲間たちがいなかったら、これほどまでの思い出になる事もなかった。ほんとにみんなに感謝している。ありがとう。



### ●徳田 潤平

今回の目標は「脱ヘタレ。」去年のキャンプで何もできなかった悔しさを2度と味わわないようにと思った。そして、そんな思いを誰にもしてほしくないと思った。そのために自分ができることをしようと思った。そして、村人がこいつらが来てくれてよかった、キャンパーがここに来てよかったと思ってもらえるキャンプにしたかった。そのために、準備にも積極的に関わった。

しかし、キャンプ中は具体的にどうすればいいか、考えることをやめてしまっていた。その結果、気づけば休んでいたり、日本人だけで談笑してたり。そういう中途半端な行動をとっていた。そういった自分の甘えに気づかされたのはみんなが病気で苦しんでいるとき。目の前にこんなに苦しんでいる人たちがいるのに、自分には何もできない。それがものすごく情けなくて、悔しかった。もっとできるはず、もっと自分を追い込めるはず、もっと回りに目をむけることができるはず。まずは、自分にできることを探した。帰ってきて、まだワークが続いているところがあるなら、そこを手伝おう。離れたところでも一人で座っている村人がいるなら、そこに行こう。料理ができてないなら、手伝おう。みんなのために、もっと、もっと、もっと動け。

結果的に自分がどれだけ周囲の役に立てたかは、正直なところわからない。もっとできたことはあった、もっとみんなの役に立てた、もっと村人の側にいられた。それでも、面白いとメッセージをくれたし、頼りにしてたとメッセージをくれた人もいた。中国で再会した日本人、中国人には「去年と変わった」といってもらえた。去年の「shy boy」が Entertainment leader をやっているんだから、当然といえば当然だけど、自分のやったことを認めてもらえてうれしかった。

このキャンプで人に優しくすることの大切さ、チームワークのすばらしさなど多くの大切なものを学んだ。そして、多くの忘れられない思い出ができた。だから、来年も行きたい。純粋にそう思えた。本当に来てよかった。



### ●古川優太郎

中国キャンプには今回初めて参加した。前回の春、フィリピンキャンプに参加させていただいたが、前回はキャンプ自体初めての参加だったため、すべてが新鮮で、驚きの連続だったのに対し、今回は、国は違うのだが、落ち着いて望めたので、違った感じ方をすることができた。

私がキャンプに参加した理由はいくつかあるのだが、日本以外の国の人と、生涯を通して現地の家族と言えるくらい関係を作りたいというのが私の心の奥にずっとあった。何年後かに「また来たよ」と言って訪問できる。そんな関係を築きたかった。なかなか行動に移すことができなかったのだが、前回のフィリピンキャンプに参加し、そのような関係を築くことができ、今回中国でもまたしたいと思ったことと、一つの国にこだわらず、いろんな国をいくことで、自分の経験を増やそうと思ったことが主な理由である。

この中国キャンプ、ほんとに笑うことが多かったと思う。

「とりあえず笑えよ。」いのちのメールアドレスのパクリではあるが、今回私が心がけたことだった。言葉が通じず、何を言っているかわからないことがしばしばあった。しかし、とりあえず笑えば相手も笑い、どこかホッとする。フィリピンでコミュニケーションをとることが困難だったとき、とりあえず笑えば何とかできるということから学んだことだった。今回の村には耳が聞こえないおじいちゃんがあった。言葉もしゃべれず、コミュニケーションはジェスチャーしかなかったのだが、笑っているとなんだかわかりあえた気になった。

日本人キャンパーの中でも、みんな常に人を笑わせようと考えている人ばかりで、(笑いのレベルには触れないで)ほんとに笑うことが多かった。

日本でこんなにも笑っているだろうか。決して Yes とは言えないだろう。中国という環境がそうさせているのか、本当に楽しいから笑っているのかは定かではないが、笑うことにより日本での悩みや辛いことを忘れることができた。

ここにはハンセン病という病を患い、私よりもずっと長い間悩み苦しむ、生きてきた人がいると考えたとき私がいかにちっぽけなことで悩んでいたかを思い知らされた。

私たちが彼らにできることはなんだろうか。物理的にはトイレを作ったり、橋を作ったりできるが、それだけではない。わざわざ中国のこんな山奥でしかもハンセン病の村に来ているのである。

彼らはただでさえ悩みや長い間受けてきた差別からの精神的ダメージなどを常に抱えている。10日という短い間に何もできやしないかもしれない。しかしほんの少しでもいい。彼らが悩みや苦しみをなくしてくれれば。彼らのマイナスの思いが和らいでくれれば。笑わせることはできないけれど、せめて、そばに居ることはできる。そうすることで少しでも彼らの笑顔が増えてくれれば。完璧に取り去ることは不可能であるが、不可能と承知した上で、ほんの少しだけでも来てくれてよかったと思ってくれれば。

最後、村を去る間際の私たちを集めて村長が「ありがとう」と言ってくれた。

ワークに参加してもふがない自分、中国人の知恵と力に圧倒され、ただ立ち尽くして見ているだけの時間も多々あった。本当に来た意味があるのかと考えた時もあった。しかし、村長のその言葉を聞いて、私はこのキャンプの成功を実感することができた。



### ●岩野晃子

初めて参加した今回のキャンプを思い出すと、一番にみんなの笑顔が浮かんできます。でも、正直言ってキャンプは決して楽しいことばかりではありませんでした。初めて体験する不便な生活に、言葉の壁、そして文化の壁。KPとして中国人側の主張が理解できないところもありました。そんな風に少しずつたまっていった違和感や不安感はキャンプ6日目に急性胃腸炎として現れました。でも、病気になっての一番つらいときに本当にみんなの優しさを感じることができました。それまでは、自分の中で無意識にどこか壁を作っていたのかもしれないと思いました。言葉が通じないから、文化が違うから、と自分の中で言い分けをしてきちんとみんなと向き合っていなかったんだと反省しました。みんながくれた無条件の優しさは、日本人キャンパーとしての私に対してのものではなくて、1人の人間としての私に対するものでした。みんなは自分のことをそうやって見てくれているのに、自分はみんなに対してそういう見方ができていなかったことに気がついてとても恥ずかしく思いました。きっと差別や偏見もこんな風に無意識に広がっていく部分があるんだと思います。まずは、自分から相手のことを知ろうとすること、本当に単純なことだけど、人と付き合う上で一番大事なことなんだと今回のキャンプで村人とキャンパーが教えてくれました。今、キャンプを思い出すと一番にみんなの笑顔が浮かんでくるのも、大変だったことをみんなの優しさで乗り越えて、楽しいキャンプにすることができたからだと思います。キャンプに携わってくれたひと、協力してくれた人みんなに「ありがとう」の気持ちでいっぱいです。 謝謝！



## ●井上祐介

なんでこんなに泣いとるんや。村を出る別れの挨拶の最中、村長の奥さんの涙を見た途端、僕はもうどうしようもないくらい、泣きじゃくっていた。

あれから1ヶ月ほどたった今、この日本でキャンプに思いをはせれば、すべてが楽しく、なにもかもが素晴らしい、そんなものだったという感想しか浮かんでこない。だけど、よくよく詳細に記憶をたどると、キャンプの最中には、決して楽しいとは言いきれない悩みを抱えていた。

その中で1番の悩みは、僕のレコーダーという役割に関してであった。レコーダーとは、記録係のことで、つまりは写真を撮るという仕事のこと。写真を撮るという行為は、絵も下手で、楽器も小学校で習ったレコーダーの「エーデルワイス」ぐらいしか弾けない僕にとって、唯一「芸術」を生み出している気にさせてくれるものだった。当然、写真を撮るのは楽しいし、大好きだった。だからこそ、僕は自ら進んでレコーダーの仕事をやりたいと名乗り出た。実際、キャンプが始まって序盤頃は最高だった。あらゆる作業、あらゆる風景を、とにかく撮れるだけ撮りたい。残せるだけ残したい。そんな思いから、暇さえあればシャッターを切っていた。

ところが、キャンプが始まって3、4日後。徐々に僕はむなしさを覚えていた。それは、他のキャンパー達が、ワークリーダーであれ、ハウスリーダーであれ、KPであれ、なんであれ、中国人キャンパーと真正面からぶち当たっていく姿が自然と目に付くようになったからだ。中国というまったくアウェイな環境の中、必死に「ここは譲れない」とばかりに主張や提案を繰り返す、互いに議論を尽くしていく彼ら。少なくとも、僕にはそんな風に見えた。反対に僕はと言えば、ただひたすら写真を撮りまくるのみ。確かに、レコーダーは特に中国人キャンパーと議論を交わす必要のない仕事ではある。だけど、僕はむなしかった。ただ写真を撮るだけじゃ、みんながそれぞれの役割として味わっている苦労をまったく味わっていない。楽すぎる。こんなものでいいのか。

なかなかほめてくれない悩みに絡まったまま、僕はキャンプ中盤のパーティをむかえた。そのパーティはみんなかなり騒いだ。ありえないくらいに騒いだ。もちろん僕も騒いだ。そして、みんなむちゃくちゃ笑っていた。素敵な笑顔だった。僕はその笑顔を残したかった。だから、写真を撮りまくった。

翌日、その写真を見返してみた。どれも温かくて、やさしい、そんな笑顔あふれる写真ばかりだった。素直にそう思えた。思えば、キャンプの中では村人もキャンパーも、誰もかもが温かった。忘れていた。レコーダーはただ記録を残せばいいんじゃない。温かくて、やさしい、笑顔あふれる写真を残して、それをたくさんの人に感じてもらうべきじゃないんだ。そして、そんな写真を残せたら、それでいいやんか。レコーダーって、そんな大事な仕事やろ？腐っちゃいかん。やるしかないやろ。それからは、もうひたすら撮りまくった。最終的に、その総数は1000枚以上になった。その中のいくつかがこれを読んでいる皆さんの目に触れて、少しでも温かさを感じてくれたら、僕はうれしく思う。

別れのとき、僕はなんであんなに泣いたんだろうか。それは、村長の奥さんの涙に大変な温かさを感じたからだ。そして、その温かさにつれてぼろぼろ泣く中で、キャンプの最中の悩みはどうやら洗い流されてしまったようなのです。



## ●淵上愛

今回のキャンプは、私にとって2回目のワークキャンプでした。

前回のキャンプに比べ、村人の人たちと自然に接することができたような気がします。前回も思ったことですが、言葉が通じないからこそわかることもあります。もちろん、言葉が通じればよりわかることも沢山あるのですが、相手の動作・態度などで相手の思っていることを感じ取ることが、自分1人で相手を理解する1つの手段なのです。相手に触れたり、数少ない言葉でコミュニケーションをとったり…。そして、笑顔！…笑顔はとても大きなパワーを持っていて、言葉を介さなくてもお互いが幸せな気分になったり、元気をもらえたりするのです。だから、「いつも笑顔でいよう！」と思えるようになりました。

村の人たちは、私たち皆に温かく接してくれ、私たちが村の一員として、孫や娘のように、10日間を過ごすことができました。その中で、彼らの優しさやワーク中の力強さなどに触れ、私も頑張ろうと思ったり、落ち込んでいる時に元気をもらったり、他にも毎日の生活では気づくことのできなかったであろうことに気づいたりすることも出来ました。

キャンプを終えた今、私たちがずっと外に出て見つめるおじいちゃんや、私たちのためにご飯をおすそ分けしてくれるおばあちゃん、笑顔が素敵なおじいちゃん……いろんなおじいちゃん、おばあちゃんと会って、一緒に過ごした日々を思い出し、一期一会って、こんなことなのだろうなと感じ、身近にいる大切な人たちをもっと大切にしようと思っています。



## ●塩川壮拳

初海外、初中国でした。

今回の中国での感想は、最高に楽しかったし、またすごく勉強になりました。

「楽しかった」というのは、中国で見たもの触れたもの全てです。

キャンプでの村人や中国人キャンパーとの交流やワークそのもの、カンファレンスで出会った人たちとの交流、中国料理店でご飯を食べたことや日本ではないような夜行列車に乗ったこと…これら全てが新鮮ですごく印象に残るもので、本当に、全身で充実感を感じながら日が暮れる毎日でした。

また、「勉強になった」ことは本当に多くあり、今でも心に深く刻まれています。そして、それらの多くは周りの人々から学ばされたものでした。

例えば、どんなにきつても弱音を吐かずには働き続ける人、自然と村人と仲良くなっていく人、いつも元気で周りを盛り上げてくれる人、さりげなく毎食食器の片づけを手伝う人、体力のある人、語学力のある人…。

挙げ出したらきりがないくらい、たくさんの人のたくさんのいいところを見つけることができました。そしてそれと同時に、自分の未熟さを思い知らされました。ですが中国にワークキャンプに来ててへこんだままのわけにもいかないの、人のいいところは必死にまねをしてまねをして…。また自分にできることはなんだろうと考えて、とりあえずやってみてやってみて…。

全て思うようにはできなかったけれども、これらの経験の全てが、自分にとってかけがえのない財産となりました。キャンプだけで終わらせるのではなく、これらで学んだことを日本でも実行したいと強く思います。



本当に勉強になったし、何よりも楽しかった！ありがとう中国キャンプ！！とみんな！！

## ●宮原久実

わたしは今回2回目の参加だった。前回の反省から、今回は村人とのつながりを積極的に作っていき、村人のニーズにあわせて自分にできることをしようと思っていた。ケアリーダーとなった理由もその一つだ。村人は初めから笑顔でわたしたちを迎え入れてくれた。どうしてそんなことができるのだろうかとても驚いた。ある人が言うには、遠く離れた地に住む人がわざわざここまでくる、それが彼らにとっては不思議なことであり、同時に嬉しいものだと思う。彼らはこれまで多くの人から差別を受けてきたのに、どうしてそんなに優しい心をもっているのだろうか。彼らは文化も言語も異なる人だけれど、人間の根本的なところは全く違わない、わたしよりもずっと大きく深い心を持った人たちだった。わたしは彼らのために何かしてあげたいという思いでキャンプに臨んだが、彼らの優しさに触れ、逆に彼らから学ぶことがたくさんあった。

キャンプ中、わたしはケアリーダーとして何もできない自分の不甲斐なさを感じていた。しかし、同じキャンパーから、くみにしかできないことがきつとある、それに話すことで村人は喜んでくれる、それが彼らの心のケアにつながっているといわれた。わたしはなにをしなければならぬとずっと感じていた。しかし、それはただの自己満足のためでしかなかったのだと気付いた。それからわたしはこれまで以上に村人と話そうと思った。家族のことを話すときの嬉しそうなお表情、また同時につらい気持ちをわたしは直に感じ、自然に手を握ったり、おばあちゃんの肩を抱き寄せていた。わたしは自分にできることを考え行動した。それは掃除や洗濯の手助けだったり、一緒に歌い笑いあうことだったり…本当に些細なことばかりだったと思う。

今回のキャンプでわたしは考えることが多くあった。ここですべてを言うことはできないが、きつとみんなも同じように多くのことを考えさせられたと思う。答えを出すことは簡単ではないけど、悩んだり、一度立ち止まって考えてみたりすることが大切なのではないかな。一ついえるのは、多くのキャンパーや村人の存在がわたしを支えてくれたことだ。わたしもまた誰かの支えになれていたらうれしい。前回よりも充実したキャンプになったと思う。村人がわたしの名前を覚えて呼んでくれたこと、彼らからわたしを抱きしめてくれたこと、最高の笑顔で笑いあえたこと…たくさんの感動があった。みんなとこのキャンプに参加できて本当によかったと思う。謝謝！！



## ●井芹和幸

初キャンプ、初中国、たくさんの方が思い出となり、経験になりました。  
行く前から、村での生活は楽しみでした。キャンプ経験者からキャンプは良いってことを耳にタコができるくらい何度も聞いていたので、勝手に期待を膨らませていました。  
実際、村にキャンプインしてからはワクワクして、ハウワークという仕事上、毎日、必ず村人と会えるのでとにかく楽しかった。  
それでも、村人の家を訪問する時の通訳はもちろんのこと、おじいちゃん、おばあちゃんの体調の変化にだって自分一人じゃ何にも気付けなかったし、ただ村人の笑顔に勝手に安心できているところがあった。  
まだまだ伝えたいこともあったし、なにより基本的な会話さえ出来ないことがもどかしくて悔しかった。それでも、みんながいてくれたおかげで、会話の中に言葉の通じない僕を頑張って入れてくれようとしたのが分かった。  
村人も筆談やジェスチャーで伝えようとしてくれて、お互い必死に伝えようとするとき、時間がかかっても伝わった時は何気ない日常会話だけとても嬉しかった。  
しかし、悩みもありハウスリーダー間でのコミュニケーションについては初日から悪戦苦闘だった。話しかけても、相手にしてもらえず、日本語で「いいです」「いいえ」って言われました。  
正直、かなりショックでした。確かに言葉も通じないし、もしかしたら自分は役に立たないかもしれない。チャレンジする前向きな意思があれば十分だろうって勝手に思ってたので相当へこみました。  
他のキャンパーに相談すると、すぐに間に入って話し合いの場を設けてくれて徐々にですがコミュニケーションの問題を解決することができました。  
約30人キャンパーがいるなかで自分ってその中のたった1人かもしれないけど、たくさんの人に支えられていることが分かって、しみじみ仲間のありがたさを感じました。  
でも、キャンプアウトした今でも後悔していることが起こりました。情報収集の怠りから起こった、ポンおじいちゃんの家へのたきぎ不足でした。本当に、申し訳ない気持ちでいっぱい、ごめんなさいという言葉しか出ません。  
それでも、最終日の朝、ポンおじいちゃんはいつも見せないような笑顔と涙で見送りをしてくれました。僕も思わず涙がでできました。笑顔で村を出ようと心に決めてたけど自然と涙が溢れてきました。言葉にならない思いでいっぱいになった。  
キャンプアウトして時間がたった今、ふと村での生活を思い出し、みんなどうしているのだろうと考えることがある。元気だろうか、仲良くしているだろうか。  
それに、今自分の周りにいる人に感謝する心が生まれてきた。たぶん、村人からももらった優しさが、自分を変えたのだろう。  
これから家族や友達、自分の周りにいる人、遠くにいる村人のことを考えながら、生活していくだろう。その度に人間の絆っていいなあとしみじみ思い、目に見えないものがみんなとつながってるんだって安心できる。  
キャンプは僕たちと村人をつなげ、村人は僕たちと家族や大切な人との絆を強くした。  
キャンプに感謝。村人に感謝。 謝 謝



## ●藤吉絵里佳

キャンプが終わってしばらく経ったが、まだいろいろな気持ちがまとまっていない。それは初めて中国に行って初めてワークキャンプに参加したせいかもしれないし、印象深い出来事が次々に起こったせいかもしれない。まだ戸惑っている部分があるのだと思う。  
でもそんな中で、中国にいるときから思っていたことがある。村人が好きということだ。私は村にいる間何もできなくて、みんなに迷惑をかけてばかりだった。当然村人に対しても何もできなくて、情けなく思っていた。でも村人はそんな私の手を握って泣いてくれた。いつも素敵で笑顔でいてくれた。本当に温かい人たちばかりで、あの村でキャンプができて幸せだったなと思う。村のおじいちゃん、おばあちゃんもそう思ってくれていたらいいなあと思う。



## 中国キャンプ参加費(一人あたり) (円)

	金額
航空券	74420
ビザ	6000
保険	7270(～8/28) 6500(～8/24)
キャンプ費	4960(310円)
ネットワーク会議参加費	4800(300円)
現地滞在費	6400(400円)
合計	98450 97680

## キャンプ会計 (円)

	金額
キャンプ費徴収 一人310円 × 30人	9300円
共同で使ったお金(ワーク費、食費等)	3165,3円(105.51円/一人)
さおやん→村	1078円(36円/一人)
村→広州	1280円(128円/一人)
パーティー費	270円(9円/一人)
合計	288円/一人 ※
	日本側に帰ってくるのは225円

※中国人が個人によってばらばらなので一人あたりで出してます

## FI九州中国キャンプ会計 (円)

	収入	支出	残高
			44394
キャンプ準備品購入		15,423	28971
(食材)		(5244)	
(医薬品)		(3976)	
(中国携帯カード)		(1040)	
(日本みやげ)		(2900)	
(その他※中国で購入したものも含む)		(2263)	
治療費(交通費含む)		3,136	25835
保険	2240		28705
			38211
寄付 ※	10136		
計	12376	18559	
繰越金			38211

※1元=16円で計算  
※寄付は各キャンパーのホテルデポジット・ネットワーク会議返還金・滞在費の余りから

## 共同会計(Account leader 管理) (円)

	収入	支出
徴収金	10400	
滞在費 400×10		
キャンプ費 310×10		
ネットワーク会議参加費 300×11		
食事代		963
8/7 夕食 273		
8/8 朝食 45		
夕食 105		
8/21 夕食 200		
8/22 夕食 350		
ホテル代		1685
8/7 685		
8/23 1000		
ホテルデポジット		159.5
移動費		1390
8/8 客村→公園前 往復 80		
客村→広州 40		
広州→さおやん 1080		
8/21 地下鉄 90		
バス 100		
キャンプ費		3100
キャンプバック(中国側から返還)	225	
ネットワーク会議参加費		3300
ネットワーク会議バック	396	
諸経費		109
合計		10539
残金	633.5	



キャンプの風景-村-



キャンプの風景-ミーティング-

## JIAネットワーク会議

### JIA ネットワーク会議へ参加して

毎年、8月下旬にJIAの国際ネットワーク会議が行われる。ネットワーク会議とは、JIAを中心とした中国ハンセン病快復村でのワークキャンプにかかわるワークキャンプ団体の代表が集まってツナガリ(ネットワーク)をつくり、一年間の活動報告と反省、今後の活動について考える場である。第5回目となる今年は広東省の広州で開催され、中国・日本・韓国などから300名近くの参加者が会場に集まった。去年の豪華なホテルとは違って、今年はキャンプ場を貸し取り、村でのキャンプの雰囲気そのままの会場で行われた。

ネットワーク会議は3日間にわたって行われる。初日の夜にはOpening Ceremonyとして、中国・日本・韓国各委員会の紹介が行われた。各委員会がそれぞれ個性あふれる紹介を行うなかで、私たちFIWC九州委員会は全員がNEMOパンツを着用して「ひょっとこ」を披露した。その夜は会場内の宿舎に宿泊し、2日目から、午前中は会場を分けて中国各地区委員会の報告、午後からはJIAの紹介とテーマ毎の分科会が行われた。夜もプログラムが行われる予定であったが、台風が接近しているということで以後の予定は急遽中止され、近くの小学校へ避難せざるをえなくなった。その後、別会場へ移動したが、オリンピック開催中だったため、外国人が集まって催しが行われることが問題となり、JIAネットワーク会議は中止。その別会場で一泊した後、日本人は3日目の昼すぎには会場を離れ、広州の大学のホテルへ移動することとなった。移動した後、大学のホテルで日本人のミーティングを行い、各キャンプの報告とエンターテイメント・ワーク・キャンプの継続・村人とのコミュニケーション・中国人キャンパーとのコミュニケーションの5つのテーマに分かれてのディスカッションが行われた。その後、日本人全員での大宴会が行われ、激動のネットワーク会議は終了した。

今回、ネットワーク会議の最終日のpartyで日本人が披露する予定だったのが、ソーラン節であった。早稲田大学 Qiao の加藤拓馬、FIWC 関西委員会の増本夏美が事前に日本で各委員会と連絡を取り、振り付けから衣装まで手配をして各委員会で練習を重ね、実際にネットワーク会議で集まってからも日本人全員で練習をして本番に備えた。台風のため披露が危ぶまれたが、移動した会場で何とか参加者を前に披露することができた。練習を通して、各委員会と交流することができ、初対面の他委員会の人たちも身近に感じられ、また九州委員会の団結力の強さも実感できた。このソーラン節はキャンプ中でも使えるので、来年以降もこのソーラン節を継続していくべきだと思う。

中国で話したり考えたりしたさまざまなことは日本に帰ってしまうと薄れていきがちになってしまう。しかし、キャンプの熱が冷めやらぬうちに、同じ想いを持った中国人や日本人の仲間たちと夜遅くまで語り合うことでキャンプの反省やこれからのキャンプについてなどさまざまなことを考え、共有できる。また、ここでできた日本人同士のつながりがきっかけとなり、中国キャンプ、FIWC委員会の年末キャンプ、さまざまな活動へとつながっていく。中国はもちろん、国内でも関東・関西・九州と、遠く離れていても、同じ想いを持ち、同じ悩みをもった仲間たちがいることをこのネットワーク会議で再認識することができる。そういう意味でもJIAのネットワーク会議は来年以降もぜひ参加してほしい大切なイベントである。



## リンホウ村訪問

### リンホウ村を訪れて

〔期間〕

8月24日～27日(4日間)

〔参加キャンパー〕

FIWC九州:5人、FIWC関西:1人、FIWC関東:2人、中国人キャンパー(庄さん):1人

〔リンホウ村へのアクセス〕

広州から潮州(広東省)まで高速バスで約6時間、潮州から乗用車(タクシー)で約40分

〔実施内容〕

- ・村人との交流
- ・村人やキャンパーの使用するガスボンベの交換
- ・ソーランもちょっと踊る



JIAの代表である原田僚太郎氏が最初にワークを実施した村であり、今ではもうインフラの整った村。リンホウ村に向かう前に私たちが知っていた村の情報というのは、ただこれだけだった。少なくとも、私はそれだけしか知らなかった。

広州から高速バスで6時間、そこからさらに車で40分ほど行った所に、リンホウ村はある。村人の数は9人。あらかじめいわれていたように、インフラはしっかりと整っていた。トイレもある。お湯の出る蛇口もある。建物もきれいだ。素晴らしい。これが理想の村か。8月24日に到着してからずっと、私たちFIWC九州の5人のキャンパーはそのことに圧倒されっぱなしだった。

翌25日、私はのんびりと過ごしていた。ワークがなければ、特に何をすることもなく、ふらふらと過ごすのも許されるだろう。そう思っていた。そもそも私はリンホウ村に「インフラの整った村ってどんなもんだろうか」という視察のようなつもりで訪れていた。つまり、リンホウ村をひとしきり見た段階で、私の中の目的は達成されてしまったのだ。この日は他2、3人のキャンパーと昼間から熱くキャンプについて語り合った。といえば聞こえはいいが、実際は村人の存在を無視していた、あまりよろしくないものだった。

そのあまりよろしくない状況に、村人は怒った。「もっと村人たちと交流を！」叱られた。当たり前だ。浅はかながら、僕はそのとき気づいた。ああ、これはワークなしのキャンプなんだ、と。この村はリゾート地ではない。村人が普通に生活を営む場であるのだ。見世物じゃない。この村でやるべきことは村人たちと交流を楽しむことなんだ。視察という気持ちじゃだめなんだ。村に来る以上、村人との交流を楽しむ気持ち、この気持ちがなければ、来る必要はないと思わされた。

26日、地元の大学に通う中国人キャンパーがやってくる。どうやら、定期的にこの村を訪れているらしい。彼らは積極的に村人と交流していた。その姿勢は素晴らしかった。昨日の私と比較してみると、なおそう思えた。だが、ひとつ気になることがあった。それは、中国人キャンパーの交流する村人が偏っているということだ。確かに、自分が話しに行きたいと思う村人と好きなだけ話すのは素敵なことだ。だけど、そうすると、他の村人は孤独を感じてしまうんじゃないか。この訪問をキャンプだと思えば、こんなことはありえない。みんなに公平に接するようにするだろう。

気楽に考えていた村を訪れるということ。これをキャンプととらえるか、そして、どんな気持ちで訪問すべきなのか。様々な課題とともに、私は27日リンホウ村を後にした。



キャンプの風景—パーティー



キャンプの風景—就寝中—

# 全体反省

## 全体反省

- 各リーダー、早い段階で仕事の確認をし、事前に相談しなければいけないことを把握し、中国側に連絡することが必要だった。
- 毎回の反省で出ることだが、言語の力を上達させておく必要がある。英語でのやり取りが主だが、中国語の勉強もしておけば、村人との会話も若干ではあるができる。
- 今回は1キャンパーが日中の言語ができたので病院に行ったときは助かった。しかし、そういう人がいなかったときのことを想定しておく必要がある。(緊急医療用語集《中国語》に各自目を通し、足りないところ補っておく等)
- だに、蚊、風邪、下痢に悩まされたキャンパーが多かった。防虫剤、スポーツドリンク等、必要だったものを新たに持ち物リストに追加しておく。その理由も明記する。体調管理等の重要性をキャンプ前に全員で確認しておく必要がある。
- お互いの言葉を教え合えたのはよかった。雰囲気を盛り上げられた。
- 日本人 MTG を行うのはよかった。メリットとして、情報共有日本人がそうることによる安心感、悩み相談、結束等。デメリットとして、中国側に誤解を生む可能性がある(なにを話しているのか分からないといった面で)。その MTG でなにかキャンプ、中国側に関して思うことがあったら妥協せず言ってみる。
- サブ GL を次回から決める。今回 GL が行けない可能性がでてきたというときに、いろいろと手間取ったため。GL と綿密な情報交換をおこなっておく人物が必要。
- ワークが中国人キャンパー主導になってしまうのは仕方のないこと。そうしたときに日本人のワークリーダーの関わり方や位置づけが難しい。日本人ワークリーダー主体のワークの採用を検討していく。
- 連絡事項、想いのたけノートの作成の検討。書けば忘れずに報告できる。その日の感想などを記しておけば、後々見直すこともでき、次の世代の人も見ることができる。
- 保険料を請求するときには、診断書と領収書が必要になるので病院に行ったときはこの2つをもらっておくことを忘れずにする。

## 参加キャンパー

- 谷之木勤任 九州大学3年
- 徳田潤平 九州大学3年
- 古川優太郎 九州大学3年
- 岩野晃子 九州大学3年
- 井上祐介 九州大学4年
- 瀧上愛 九州大学3年
- 塩川壮拳 西南学院大学4年
- 井芹和幸 熊本県立大学2年
- 藤吉絵里佳 熊本県立大学2年



**FIWC九州**(代表:谷之木勤任)  
 mail: fiwcq@hotmail.com  
 web: http://fiwcq.fc2web.com(FIWC九州)  
 http://fiwc-c.com/(FIWC中国キャンプ)

**JIA「家」**  
 JIAヘッドオフィス  
 ryotaro\_harada@hotmail.com(原田僚太郎)  
 JIAボランティアセンター  
 workcamp@yahoo.com(Steve Kang)

# 地図

## 中国地図



## 湖南省地図

